

アメリカの聖女たち

——キャリー・ネイションとジェイン・アダムズ——

大井 浩二

世紀転換期のアメリカを騒がせた女性といえ
ば、誰しもキャリー・ネイション (Carry A.
Nation, 1846-1911) の名前を思い浮かべるの
ではないか。片手に聖書、片手に手斧という勇ま
しい姿で、つぎつぎと酒場に襲いかかり、アル
コールのないアメリカを作ろうという禁酒運動
に身を捧げた女性である。身長6フィート、体
重175ポンドの彼女は、ほとんど伝説的な人物
になってしまっているが、“hatchetation”と
いう単語を造ったことからわかるように、酒
場で彼女が振りまわした手斧は、いささか物騒
なトレードマークであった。ネイション夫人が
嫌悪したのはアルコールだけではなく、タバコ、
モードの絵画や彫刻、コルセットなどで、周り
にいるけしからぬ男どもを「ニコチン漬けの、
ビールに汚れ、ウイスキーでむくんだ、赤い目
の悪魔」と毒づき、その口にくわえた葉巻や巻
きタバコをいきなりひったくったといわれる。
だが、そうした彼女の生きざまは、世紀末アメ
リカの現実とどのように関わっているというの
だろうか。

1908年にキャリー・ネイションが出版した自
伝は『キャリー・A・ネイションの生涯の効用
と必要』¹ という奇妙なタイトルであるが、「驚
くべき深さと価値をもった自伝」とか「驚く
ほどにすぐれた自伝」² とかいった賛辞が捧げ

られている。この400頁近い本には、波乱万丈
としか言いようのない彼女の生涯が「わたしの
仕事はほとんど終わった」と感じる62歳の夫人に
よって書きつづられているのである。それによ
ると、彼女はケンタッキーの片田舎に生まれ、
放浪癖のあった父親のおかげで、少女時代は中
西部の各地を転々とする生活を送っている。母
親は精神に異常をきたして、自分のことを
ヴィクトリア女王と思いこみ、それにふさわし
い処遇を受けることを要求していた。21歳のと
きに結婚した最初の夫チャールズ・グロイド
(Charles Gloyd) は、ひどいアルコール中毒患
者であったし、2人のあいだに生まれた娘は幼
時に右頬がはれあがる奇病にかかったばかりか、
結婚して8人の子供を生んだあと、これまたア
ルコール依存症になった、などと聞かされると、
ネイション夫人が禁酒運動に情熱を燃やすにい
たった事情がよくわかるような気がしてくる。

2番目の夫のデヴィッド・ネイション (Da-
vid A. Nation) は19歳も年上で、説教師、弁
護士、編集者など、どの職業についても成功せ
ず、生活能力のない彼は、妻に頼るばかりであ
ったらしいが、1901年には「地位放棄」を理由
に、有名人になった夫人を離婚している。

ネイション夫人が禁酒運動に没頭しはじめた
のは1892年のことで、最初は W.C.T.U. (キリ
スト教婦人禁酒同盟) の仲間とともに不法な酒
場に押しかけて、営業を妨害したりする程度だ
った。だが、彼女の行動はしだいにエスカレー
トしていった、1900年12月27日にカンザス州ウ
ィチタにやって来た54歳の彼女は、旅行カバン
のなかに「1フィートばかりの長さで、親指ほ
どの太さの鉄棒」と「1本のステッキ」をしのば

1. *The Use and Need of the Life of Carry A. Nation* (Topeka, Kansas: F.M. Steves & Sons, 1908).

2. Robert Lewis Taylor, *Vessel of Wrath: The Life and Times of Carry Nation* (New York: The New American Library, 1966), p.22; Edward Wagenknecht, *American Profile, 1900-1909* (Amherst: Univ. of Massachusetts Press, 1982), p. 184.

せていた。どの酒場を襲おうかと、14軒ばかり物色したあと、当時中西部で最も豪華であったケアリー・ホテルに目をとめるが、このホテルのとなりにはケアリー・アネクスともケアリー・バーとも呼ばれる酒場があった。そこで「わたしの目に映った最初のものは、鏡の反対側にある裸婦の等身大の絵だった。これは油絵で、ガラスが張ってあり、それを描いた画家から借りて来た非常に立派な絵であったが、下劣な目的のために、その店に置いてあった」と夫人は説明している。この絵はジョン・ノーブル (John Noble) という画学生作品で、「入浴するクレオパトラ」と題されていたとのことである³。

ともあれ、このヌードの絵を見て激怒したネイション夫人はバーテンを呼んで、衣服を身につけている女性でさえも入ってくるのが汚らしい場所に、素裸の女性の絵を飾るのは、「彼自身の母親を侮辱するようなものだ」と話しかけた。こうして、ケアリーの酒場をターゲットと定めた彼女は、ホテルの自室に取って返すと、その夜はほとんど一睡もせずに祈ったあと、翌朝、たった一人で、鉄棒を縛りつけたステッキをもって出かけるが、「できるだけたくさんの石をマントの下にしおぼせた」と自伝に書かれている。「わたしはケアリーの酒場に入行って、例の絵に石を投げつけ、それから、大きな部屋の片面を覆わんばかりの鏡を割った」が、数人の客は逃げ出し、バーテンも「その場に釘づけになって、動けないようだった」ので、「わたしはステッキを取って、サイドボードを叩きこわした。その上には、あらゆる種類のアルコール飲料が並んでいた」のである。このあと彼女は逮捕されて留置場に入れられるが、このウィチタでの事件をきっかけに、同じパターンの行動がその後何回となくくり返されることになる。ネイション夫人が実際に手斧をもって酒場を襲ったのは、1901年1月21日、ウィチタを再度訪れたときのことで、ある伝記作家は、この手斧を「怒りと破壊の象徴」と呼び、これをもって彼女が登場した瞬間、「ついに歴史における彼女の地位に極印が押されることになっ

た。それ以後、彼女がこの復讐の道具をもたずに写真におさまることはまずなかった」⁴と語っている。

その後、ネイション夫人はニューヨークを含むアメリカ各地に出かけては騒ぎを引き起こし、器物破損などのかどで30回も逮捕されることになるが、この辺の事情は、ここであらためて紹介するまでもあるまい。だが、彼女の行動は、こうして手斧片手に酒場に襲いかかることだけに限られていたのではない。彼女は自伝を書きあげることによって、禁酒の必要性を説いただけでなく、*Smasher's Mail*, *Home Defender*, *Hatchet* という3種類の新聞を短期間ながら発行していたこともあり、やはり禁酒をテーマとした戯曲を2編も手がけている。その1編は *The War on Drink* という題であったが、出版社を見つけることができず、もう1編の *Hatchetation* という作品は完成にいたらなかったものの、T.S. アーサー (Timothy Shay Arthur, 1809-85) の有名な禁酒小説『酒場の十夜』(1854)⁵が1903年に新しく劇化されて、ニュージャージー州エリザベスで上演されたときに、このタイトルを売りつけることができた、と言われている。それだけでなく、夫人自身もこの芝居に出演していて、特別に用意された酒場を襲う場面では、きわめてリアルに熱演した結果、翌日の劇評によると、44箇のグラスと22本の酒ビン、それに椅子4脚とテーブル3台を叩きこわしたとのことである⁶。

ここで、ネイション夫人が、どのような形であるにせよ、アーサーの代表作と関わっていたという事実に注目する必要があるだろう。この小説は、シーダーヴィルという小さな村に新しい酒場ができたために、牧歌的ともいえる村が急速に崩壊して行く姿を描いていたが、その目指すところは、アーサーのいう「道徳の退廃」(moral deterioration) のない世界であった。

4. Taylor, p. 153.

5. *Ten Nights in a Bar-Room*, ed. C. Hugh Holman (New York: The Odyssey Press, 1966).
なお、この作品は1858年に劇化され、半世紀にわたって上演された。

6. Taylor, p. 339.

3. Taylor, p. 131

ネイション夫人は、その一見いささか奇矯に思われる行動にもかかわらず、禁酒運動に身を捧げることによって、『酒場での十夜』の著者と同じように、「道徳の退廃」を知らないアメリカを夢みていたのではないか。彼女は禁酒小説の世界から、そのまま抜け出してきたようなヒロインとして、アメリカの浄化という十字軍的運動に参加していたのである。1911年1月13日、講演中に倒れた彼女の最後の言葉が“I have done what I could.”であったというのも、そうした彼女の使命感を表わしていると考えていい。彼女が自分の名前をつねに Carry A. Nation と書くことを好んだのは、「彼女の全生涯の目的が、酒類の醸造販売禁止に向けて国家 (the nation) を運んで行く (carry) ことであつたからである」⁷という評言があつたことを、ここで指摘しておきたい。

だが、なににもまして興味ぶかいのは、夫人による酒場撲滅のキャンペーンがカンザス州トピーカにおいてピークに達したという事実ではあるまいか。1901年1月27日、彼女はウィチタからトピーカ入りするが、トピーカは当時の新聞で「腐敗の下水だめ」(a cesspool of corruption)⁸と呼ばれていた町で、40ものもぐり酒場があつたといわれ、この町を夫人が攻撃目標に選ぶのは時間の問題とされていた。2月5日の早朝、夫人と二人の仲間は吹雪をついて行動を起こし、州会議員や裁判官などが愛用していたセネート・バーに殴り込みをかけ、大きなダメージをあたえることに成功する。そのときの様子は、自伝のなかで次のように書かれている——「明け方近くだった。バーテンは大声をあげて、わたしのほうに走ってくると、わたしの手から斧をもぎとり、天井に向けてピストルを発射して、裏口から駆け出して行った。わたしは仲間の女性から別の手斧を受けとった。それからカウンターのうしろに走りこみ、鏡とその下にある酒ビン全部を叩き割り、レジスターを持ちあげて投げつけ、そのあとで冷却装置の栓をこわしてドアを開け、ビールを通すゴム管を

切断した。わたしはスロットマシンをひっくり返して、それをこわし、鋭い鉄片を手にもって、大小のビール樽の栓をこじ開けると、ビールが四方八方に飛び散って、わたしは全身ずぶ濡れとなった」。こうして、ネイション夫人は駆けつけた警官に逮捕されるけれども、この事件をきっかけとして、トピーカの実業家たちが酒場を追放するキャンペーンを起こしたり、酒場の打ちこわしがカンザス一帯にひろがったりするなどして、禁酒運動は大きな高まりを示すことになる。

このトピーカの町では、ネイション夫人が路上で演説していたとき、一人の男がやって来て、シロメでできた小さな手斧をいくつか手渡すと、これを売って罰金などを支払うめの資金に使うように、とすすめてくれることもあつた。そのときから、この「小さな手斧」は「わたしの忠実な守り神」になった、と彼女は書いている。それは「汽車賃やホテル代を払ってくれたし、酔っ払いの女房たちのためのホームの支払いをするのを手伝ってくれた」だけでなく、「わたしの小さなメッセンジャー」となって、禁酒のメッセージを伝えてくれた、とも書かれている。彼女はまた、この手斧という記念品について、「大きな目的のための、これほどに大きな宣伝はなかった」とも述べ、「神は手斧の使命を祝福したもうた」と語っているのである。トピーカにおいて、彼女の唯一の武器である手斧は、「復讐の道具」というだけでなく、彼女が禁酒運動という聖なる使命にたずさわっていることを示すシンボルになったと言ってもよいだろう。

すでに触れたように、カンザス州トピーカは「腐敗の下水だめ」と呼ばれていたが、この呼び名は、「金メッキ時代」のアメリカについて語ったヘンリー・アダムズ (Henry Adams, 1838-1918) がほぼ同じ言葉を用いていたことを思い出さずにはおかない。1869年、イギリスから帰国した彼を待ち受けていたのは、政治的な墮落と混乱のなかにあるアメリカの現実であつたが、それを目のあたりにしたアダムズは「18世紀の最悪のスキャンダルでさえも、これ[エリー疑獄]のそばに置くと比較的無害となっ

7. Wagenknecht, p. 179.

8. Taylor, p. 216.

た」と自伝のなかで述べ、こうした「下劣な腐敗の、不潔な下水だめ」(one dirty cesspool of vulgar corruption)のような現実が「社会の重大な活動力のすべて」を毒している、と語っていた。⁹ 1869年のアダムズにとって、アメリカ合衆国が「下劣な腐敗の、不潔な下水だめ」であったとすれば、1901年のネイション夫人にとって、「腐敗の下水だめ」としてのトピーカは、南北戦争後の、共和国の理想からはるかに遠ざかった合衆国の現実の縮図であったのではないか。「金メッキ時代」を語るにあたって、アダムズは18世紀のアメリカと対比させていたが、トピーカの「腐敗」の象徴としての酒場と戦うネイション夫人は世紀転換期のアメリカを、共和国の美德にあふれた18世紀の状態に回復させようとしていたと言えるかもしれない。いや、『ヘンリー・アダムズの教育』の著者にとって、ジョージ・ワシントンが「北極星」のような存在であったとすれば、¹⁰ ネイション夫人が振りかざす「手斧」から、あのワシントンとサクラの木のエピソードにおける「手斧」を連想する読者がいるとしても不思議はあるまい。彼女が夢みていたのは、M.L. ウィームズの伝記¹¹ に描かれたワシントンによって象徴される美德の共和国であった、と言ってよいだろう。

他方、この「腐敗の下水だめ」と呼ばれたトピーカこそ、1897年に出版されて爆発的な人気を呼んだ小説『御足の跡』¹² の著者チャールズ・M・シェルドン(Charles M. Sheldon, 1857-1946)が牧師をしていた町であった、という事実を見落としてはならない。この小説では、主人公ヘンリー・マクスウェル牧師の呼びかけに応じたカンザス州レイモンドの人びとが「イエスならどうするか」(What would Jesus Do?)とつねに問いつづけ、キリストになった生活

をすることを誓って、「清潔な都市生活」のために戦う姿が描かれている。その町のモデルになったトピーカで、ネイション夫人が大活躍をするにいたるというのは、単なる偶然の一致として片付けられるだろうか。一見いかにも狂気じみた破壊行為に駆り立てられていたかに思われる彼女もまた、「イエスならどうするか」という問いかけを発していた一人であったかもしれない。「恐るべき毒ヘビ」とシェルドンが呼んだ酒場を追放することを願っていた彼女は、『御足の跡』の登場人物たちと同じように、「ラム酒と墮落」に挑戦していたのであり、「毒ヘビ」のいないエデンとしてのアメリカを夢みていたと考えてよい。トピーカの町における1901年のネイション夫人は、『御足の跡』におけるシェルドンの主張を実践する救済者的ヒロインであった、と言わねばなるまい。

勿論、アルコール根絶のキャンペーンを展開するにあたって、シェルドン自身はネイション夫人のようにラディカルではなかったし、暴力を行使することもなかった。それどころか、ネイション夫人がトピーカにやって来て、酒場追放の運動が盛りあがりを見せた1901年2月10日、彼は自分の教会で、あくまでも中庸を説く説教をおこなっている。彼は「トピーカの市民がみずからの手で法を強制するという主張に賛成していなかった」のであり、「より良い方法は、警察に法を強制するようにし向けることであって、もし警察がそれを立派にやろうとしない場合には、そうしようとする者を選ぶことである」¹³と考えていた。だが、彼はネイション夫人の行動に対しては、かなり好意的であって、「牧師仲間たちが、もぐり酒場を自分の手でこわそうとする彼女の行為にしばしば当惑したのに対して、シェルドンは、すくなくとも一度は彼女を招いて、セントラル・チャーチで話しをしてもらっている」¹⁴と伝記作者は書いている。

どうやら、シェルドンは夫人のほとんど宗教

9. Henry Adams, *The Education of Henry Adams* ([1907], Boston: Houghton Mifflin, 1973), pp. 271-72.

10. *The Education of Henry Adams*, p. 47.

11. Mason L. Weems, *The Life of Washington*, ed. Marcus Cunliffe (Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard Univ. Press, 1962).

12. *In His Steps*, ed. C. Hugh Holman (New York: The Odyssey Press, 1966).

13. この説教に関する新聞記事については, Timothy Miller, *Following In His Steps: A Biography of Charles M. Sheldon* (Knoxville: Univ. of Tennessee Press, 1987), p. 250 note を参照。

14. Miller, p. 169.

的といってよい情熱に深い感銘を受けていたとみえて、彼女の死後の1930年1月には彼女を回想する3篇の文章を発表しているが、そのなかで彼は「神の声とまったく無縁であるために、それを耳にしても聞き分けることのできない、数多くの独善的で、自己満足した善良な市民」とくらべると、ネイション夫人は「地上の聖女であった」と書きとめているのである。この点について、さきに引用した伝記作者は、「こうして、ネイションの直接対決という方法に対するシェルドンの支持は、実際の時期よりも回想した場合のほうが強かったように思われる。しかし、彼女の目的に対する彼の支持は揺らぐことがなかった」¹⁵と説明している。ネイション夫人が『御足の跡』に登場する人物の一人であった、という主張は、一見思われるほどに奇矯ではない、と言えるのではないか。とりわけ、彼女が「聖女」であったというシェルドンの見解は、彼女の救済者的ヒロインぶりに新しい光を投げかけることになるのである。

というのも、「聖女」としてのネイション夫人ということになると、彼女と同時代のもう一人の「聖女」ジェイン・アダムズ (Jane Addams, 1860-1935) の名前がおのずと浮かびあがってくるからである。たしかに、アダムズ女史はシカゴのスラム街の一角でセツルメントの運動を始め、ハル・ハウスを拠点として長年社会のために奉仕した女性であり、1931年にはノーベル平和賞を受けてさえいる。すくなくとも第一次世界大戦までは「聖女」と呼ばれ、「聖ジェイン」と称されていた彼女を、いくらシェルドンの発言があったとはいえ、一般には「狂女」扱いをされかねないネイション夫人と並べて論じようとすれば、あるいは読者のひんしゆくを買うことになるかもしれない。だが、シカゴにおけるアダムズ女史の活躍ぶりは、やはり『御足の跡』の後半部において、シカゴの浄化のために奮闘する登場人物たちの姿を自動的に思い出させはしないか。トピーカにおけるネイション夫人も、シカゴにおけるアダムズ女史も、ともにシェルドンの虚構の世界で活躍す

る人びと、「イエスならどうするか」を問いつづけた人びとの仲間であった、と言ってもおかしくあるまい。

1910年に出版されたアダムズ女史の自伝『ハル・ハウスの20年』¹⁶がシカゴにおける彼女の「聖女」ぶりを記録した名著であることは、今さら書き立てるまでもない。そこではハル・ハウスの設立に先立つ準備期間のことや貧困の問題、さらにはトルストイとの関係やロシア革命などについて語られているが、それはただ単に個人的な回想というだけではない。むしろ、章を追うにつれて、女史自身は遠景に退いて、シカゴのかかえるさまざまな問題が客観的に物語られているといった印象を受ける。この自伝の後半には「個人的な問題や動機への言及がほとんどない」ために、「それは勝利と悲劇に関する人間的な物語にみちた本となっている」¹⁷という論者もいる。だが、それだけにかえて、アダムズ女史の少女時代の思い出が詳しく書きこまれている最初の2章は、『ハル・ハウスの20年』のきわめて魅力的な部分となっているのである。

この本の第1章は“Earliest Impressions”と題されていて、赤ん坊のときに母親を失った少女ジェインと父親との生活におけるエピソードが回想されている。だが、その生活が美しい自然のなかで営まれていたことを、読者としては見逃すことができない。著者自身が語っているように、「こうした早い時期の思い出は、すくなくともイリノイ州にとっては珍しい、田園的な美しさにあふれた風景のなかに置かれている」のである。「村のまわりの平原」には、ところどころに丘があり、「その丘の一つは松林に覆われていた」ことや、「水車用の水路の堤」で遊び暮らしたことなどを彼女は思い起こし、「わたしたちのお気に入りの場所や木や鳥や花」についても語っていた。「子供たちが自然との

16. *Twenty Years at Hull-House with Autobiographical Notes* ([1910], New York: The New American Library, 1961).

17. Allen F. Davis, *American Heroine: The Life and Legend of Jane Addams* (New York: Oxford Univ. Press, 1973), p. 171.

15. Miller, p. 250 note.

あいだに作りあげる友好関係を再現することはむづかしい」とアダムズ女史は述べているが、彼女とイリノイの「自然」とのあいだに「友好関係」が存在していたことは疑うべくもない。

アダムズ女史はまた、“Influence of Lincoln”と題する第2章で、父親がリンカーン大統領と親交があったことを紹介したあと、彼女が4歳半のときに大統領が暗殺されたことを思い出している。「わたしの父はいつもリンカーン氏のことを殉教者の大統領と語っていたし、わたしはこの偉大な名前を耳にするたびに戦慄をおぼえた」という一文は、第16代大統領に対する彼女の深い敬愛の念を物語っている。後年、彼女がオクスフォードを訪問したときにも、「リンカーンの影響が活力をあたえたり意味を明確にしたりする力」をもっていることを実感するが、「リンカーンの思い出」が「草原を吹きわたる新鮮な微風のようにやって来た」というのは、その「思い出」が少女時代の「自然」の世界と密接に結びついているからにほかならない。この第2章は、リンカーンこそ、「アメリカが世界の道徳的生活になした最も価値ある貢献」が「民主政治」であることを明らかにした人物である、という言葉で終わっている。こうして、アダムズ女史にとって、リンカーンはアメリカの理想的なヒーローであったが、同時にまた、この章は「彼女自身をリンカーンと結びつける結果になっている」のであり、彼女自身が「勤勉・謙譲・誠実・正直といった古風なアメリカ的美徳の最高のものを表わすことになった」¹⁸ という評言を忘れることができない。そして、このアダムズ女史の尊敬してやまないリンカーンの「アメリカ的美徳」は、彼が M.L. ウィーム

ズによる伝記を通じて、初代大統領ジョージ・ワシントンから学びとった「美徳」であった。¹⁹したがって、アダムズ女史の「美徳」は、アメリカ中西部の「自然」のなかで育まれた、共和国の理念と切りはなすことのできない「美徳」であった、と言わざるを得ない。

いずれにせよ、『ハル・ハウスの20年』の冒頭に描きこまれた世界は、大都市シカゴの貧困に打ちひしがれたスラム街のそれとあざやかなコントラストをなしている。アダムズ女史も、少女時代の幸福な日々について語ったとき、「自由な田舎の子供たち」の生活が、車の往来のためにいつも遊びが中断される「都市の子供たちの生活」と対照的であることに触れていた。だが、この「田舎」と「都市」の対立という図式は、アダムズ女史が設立したハル・ハウスとシカゴのスラム街とのあいだにも見出されるのではない。彼女はハル・ハウスの壁に外国の絵を何枚もかけて置いた理由を説明して、「新しい、奇妙な印象の海」のなかに投げこまれた移民たちのために「なれ親しんだ島」を作るためであったと語っているが、このハル・ハウスそのものが、「新しい、奇妙な印象の海」のなかにいる移民にとっては、一つの安全で平和な「島」であったにちがいない。そして、その「島」としてのハル・ハウスは、そのまま彼女の安全で平和な中西部の生まれ故郷の町に直結していると考えていい。腐敗と混沌の渦巻くシカゴのなかに、アダムズ女史は古き良き少女時代の過去を再現しようとしていた、と言ってよいだろう。

しかも、アダムズ女史の生まれた町の名前がシーダーヴィル (Cedarville) であったといえ、注意深い読者は、ネイション女史とつながりのあったアーサーの『酒場での十夜』の舞台となっている村の名前がやはりシーダーヴィルであったことを思い出すにちがいない。勿論、アーサーの場合、それはあくまでも架空の名前であったことは言うまでもないが、この偶然の一致は、アダムズ女史における「島」の意味をさらに明確にするのに役立つ。『酒場での十夜』の冒頭におけるシーダーヴィルは、彼女が生ま

18. Davis, p. 164.

19. George B. Forgie, *Patricide in the House Divided: A Psychological Interpretation of Lincoln and His Age* (New York: W. W. Norton, 1979), pp. 34-49; Dwight G. Anderson, *Abraham Lincoln, The Quest for Immortality* (New York: Knopf, 1982), pp. 3-61; John P. Diggins, *The Lost Soul of American Politics: Virtue, Self-Interest, and the Foundations of Liberalism* (Chicago: Univ. of Chicago Press, 1984), pp. 303-04.

れ育ったシーダーヴィルと同じように、平和で牧歌的な風景そのものであった。それがアルコールの害毒によって、10年後にはすっかり荒廢してしまっている。村全体に「食い荒らす癌」が根をおろし、かつての面影は見るべくもない。アーサーにとって、シーダーヴィルが「変化」にさらされた世界であったのと対照的に、アダムズ女史にとってのシーダーヴィルは、「変化」を拒絶した世界にほかならない。ハル・ハウスにおける彼女は、シーダーヴィルの牧歌的空間をシカゴのスラム街に確立することを目指していたのではあるまいか。

こうして、二人の「聖女」は、『酒場での十夜』を仲立ちとして、またしても急速に接近しているが、そういえば、ネイション夫人の自伝にも、牧歌的な故郷の風景がたっぷり描かれていた。農場の近くを流れるディクス川には「大きな岩棚」があって、その下によく坐っていたことや、「玄関のポーチ」からは「白や紫のムクゲの繁み」が見え、「すごく大きなスギの木」がそびえていたことなどを彼女は回想している（ここでも“cedar”への言及があることを注意しておこう）。とりわけ、「わが家の左側には庭があった」と彼女が書き、「わたしは古めかしい庭、ものの本に書かれている庭、歌にうたわれている庭について読んだことがあるけれども、なつかしいわが家の庭にまさる庭は見たことがない」とつけ加えていた事実を見落としてはなるまい。「柵のすぐ内側にはイトランがむらがっていた。それから、小道をふちどる紫色のイチハツ。タチジャコウソウ、コエンドロ、ショウブ、ヨモギギク。柵をよじのぼっているジャスミン。バイカウツギとシジミバナ。黒や赤や黄やピンクのバラ。ほかのいろいろの種類バラや灌木。それにオランダイチゴ、キイチゴ、グズベリー、スグリ。さまざまの種類スモモやアンズもあった」。

この「美しい場所」について書くためなら、いくら時間をかけてもいい、とネイション夫人は語っているし、彼女の伝記作者もまた、「ネイションの自伝の最初のいくつかの章」に「抒情的な要素」があることを認め、「ネイション

夫人が情感をこめて子供時代の家について書いているのも不思議はない。その後の彼女は改革の嵐が吹き荒れるなかで、二度とそのようなまどろみの世界で暮らすことがなかったからである」²⁰と書いている。たしかに、酒場に襲いかかった彼女の行動的な生涯は、そうした「まどろみの世界」と無縁であったけれども、彼女が破壊のあとに建設しようとしたのは、ほかならぬその「まどろみの世界」、美しい草花の咲き乱れる「庭」のイメージと切りはなすことのできない「わが家」の平和と秩序であった、という見方もできるにちがいない。彼女は自分の署名の下に“Your Loving Home Defender”と書きつけることを好んだと言われるが、彼女が守ろうとした「ホーム」は、子供時代の「庭」と密接に結びついているのではないか。さらにいえば、ケンタッキーの彼女の生家の近くには、リンカーンの生まれた丸太小屋がいまも残されている。²¹アダムズ女史がそうであったように、ネイション夫人もまた、リンカーンによって象徴される「古風なアメリカ的美徳」にあふれたアメリカ共和国を、世紀転換期の混沌とした現実のなかで夢みつづけていた、と考えていだろう。

こうして、ネイション夫人もアダムズ女史とともに牧歌的な故郷に対して強い愛着を示しているが、この二人の女性は、それぞれの父親に対して、異常なまでに深い愛情をいだいていた点でも、奇妙に一致している。ネイション夫人の場合、「わたしにもし地上の天使というものがあつたとすれば、それはわたしの父だった」と書き、「わたしは愛すべき性格をもった多くの男性に出会ったけれども、わたしの見るところ、父に匹敵する者は一人もいなかった。父は聖人ではなかったが、一人の人間——神の作りたまうた最高の作品の一つだった」という文章を残している。夫人の自伝には「不名誉なこと何一つしなかった父の思い出」がいくつか語られているが、なににもまして印象的なのは、「父に似ることを切望した」彼女が「右側の歯

20. Taylor, pp. 22-23.

21. Taylor, p. 26.

をすりへらそうとした」というエピソードではあるまいか。「それは、父の右側の歯がすりへっていたからだった」と彼女はさりげなく説明しているけれども、そこには父と娘の濃密な関係がくっきりと浮き彫りされているのである。

他方、『ハル・ハウスの20年』の著者もまた、その冒頭で「これら[子供時代の印象]のすべてが直接父に結びついている」と述べ、「父に対するわたしの大きな尊敬と誇りは、いろいろの奇妙な形で表われた」と書いている。たとえば、彼女は「わたしのハンサムな父がこんな不器量な女の子を娘にもっていることを『他人』に知られると思っただけでもいやだった」と語り、父親に対する「この犬のような愛情」を表わすために、あれこれと「グロテスクなことを試みた」と語っているが、その「グロテスクなこと」のなかには、若い頃に粉挽場で働いていた父親と同じように、自分の親指が平らになることを願ったことが挙げられる。「わたしは、わたしの右の親指が平らになることを願った以上に必死になって何かを願ったことは、それ以来一度もないと信じる」とアダムズ女史は説明している。そして、「指の変形」が手間どるのに失望した彼女は、こんどは父親の両手にあるのと同じ「小さな紫や赤のしみ」ができることを願ったりもしている。「わたしは、あの遠い昔に、粉挽き職人であった父の若い頃の苦労を理解したい、という切なる願いにやつれていた」というのである。

父親と同じような歯と親指になりたいと切望しているネイション夫人とアダムズ女史。二冊の自伝に見られる偶然の一致は、二人の「聖女」たちの行動を根底から支えていたのが、父親を中心とする少女時代の平和な家庭のヴィジョンであったことを物語っているのではないか。シカゴにシーダーヴィルの世界を作りあげたアダムズ女史も、トピーカで手斧を振りかざしていたネイション女史も、それぞれ博愛と暴力という異なった手段によってではあるけれども、「大都市の罪と恥辱と墮落」(シュeldon)のないアメリカの回復をめざす救済者的ヒロインであった、と言わねばなるまい。「1865年以降、

多くの中産階級の女性、彼らの家庭の純粋さが夫たちの墮落したマーケット的世界における救済力となることを要求しはじめた」²²と D. W. ノーブルは論じているが、二人の「聖女」の生きざまは、そのことを見事に裏書きしているのである。

22. David W. Noble, *The Progressive Mind, 1890-1919* (revised ed.; Minneapolis: Burgess Publishing Co., 1981), p. 82.